



↑海岸近くの横後さんの畑。「結岬」は、外葉がコンパクトなため、畝間に入って作業しやすい。



↑切る前に、ひと玉ずつ手を当てて結球具合を確認する。「結岬は、過肥大せずに、中身がしっかり詰まるから、箱詰めしやすい」と横後さん。



↑「結岬」の断面[右]。先に内側の葉が生長して、葉球全体が充実していく肥大型。



↑「結岬」は、L玉を8個詰めてもはみ出さず、球じまりがよいので、重量不足の心配もない。



↑「結岬」は、70年以上の歴史と実績をもつ「灯台印」の新たな一員として、有望視されている。

先に内側の葉が小さな葉球を作り、1枚1枚の葉が肥大していく「肥大型」の2タイプがあります。JAちばみどり営農センター銚子の中島慎平さんによれば、

「暖秋・暖冬の影響で生育が前進すると、過繁茂となることで中身の詰まりが遅くなり、適サイズで収穫するとブカ玉で量目不足に。詰まりを待つと過肥大となってしまう」

利根川の河口に位置する銚子市周辺は土壌が肥沃で、他のキャベツ産地と同じ品種を作ると、結球せずに葉が広がってしまう傾向にあります。

一方、新品種の「結岬」は、中心部からじわじわと大きく育つ「肥大型」。だから大きさが基準に達していれば、中身もしっかり詰まっていて、重量不足になる心配はありません。

長年キャベツを作り続けてきた横後さんも、「結岬」の詰めやすさを実感さ

れたようで、

「1〜2月は寒さに強い従来品種。その前後は箱に詰めやすい「結岬」が、主力になっていくでしょう」と話されていました【図1】。

変わる市場のニーズにも応える

さて、銚子市でキャベツの栽培が始まったのは1953(昭和28)年。その5年後には「灯台印」銚子蔬菜出荷組合連合会を結成しました。犬吠埼の灯台を冠したロゴは、当時からこの産地のシンボルで、かつて竹カゴでキャベツ出荷していた時代に使われた荷札にも、灯台が描かれています。

その後、キャベツ栽培は沿岸部から内陸へと広がり、栽培面積は系統出荷のみで約1211ha。令和7年度の出荷量は、年間630万ケースに達する見込みです(JAの集計による)。

沿岸部周辺では、巨大な風力発電の

風車が何機も回っていて、風の強い地帯であることを物語っています。それはキャベツにも影響していて、結球した玉の上部が寒風で傷んですだれ状になり、まるで「トンボの羽」のようになってしまうのも悩みの種。冬季の強風に負けない、強い品種と株作りを探索し続けてきました。

それは育苗にも及んでいて、銚子では幼苗を大量に育てるセル苗ではなく、昔ながらの地床栽培が主流。「結岬」は、8月中下旬に播種をして、地床で苗を育て、9月下旬〜10月上旬に定植。12月〜3月の収穫を迎えます。

「大きめのしっかりと苗を作ること、風に揺さぶられても負けずに育つのです」(横後さん)

かつて銚子では冬はがっちり寒玉系、春はふんわり春系と、作り分ける傾向がありました。しかしここ20年ほどの間に市場のニーズも変わり、季節で品種を差別化するより、キャベツそのものの品質が重視されるようになっていきます。

「肝心なのは、病気に強く、傷みがないこと。形状がまとまっていて、量目不足にならない。それが大事です」

葉肉が厚く、過肥大しにくい良質系キャベツ「結岬」は、伝統ある「灯台印」キャベツの新たな一員に加わって、産地の期待に応え始めています。